TMU DIVERSITY PROMOTION OFFICE

No.40 March 2025

Newsletter
ダイバーシティ通信

TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY 東京都立大学

2024年度 第２回 バリアフリー講習会
「障害のある学生との減災に向けての取り組み」

Contents

1
2024年度第２回 バリアフリー講習会「障害のある学生との減災に向けての取り組み」～個別避難計画書作成を中心に～

2
ユニバーサルデザイン・マニュアル（イベント編）発行
寄稿「ダイバーシティ推進室での活動を振り返って」
寄稿「拝啓　ダイバー室の皆さま」

3
「東京都立大学 多様な性に関するハンドブック」発行
セクシュアル・マイノリティ教職員研修
コラム　ダイバーシティとスポーツ

4
障がいのある学生支援2024年度総括
学生支援スタッフ振り返り会
東京都立大学一時保育施設「都立大KIDS」
ダイバーシティ・ブックレビュー

個別避難計画書作成を中心に

2025年2月20日（木）、今年度第2回バリアフリー講習会「障害のある学生との減災に向けての取り組み～個別避難計画書作成を中心に～」を開催しました。

近年、障がいのある学生や教職員の数は増加傾向にあり、彼らの障がい特性も年々多様化しています。そのため、同じ障がい種別や程度に見える場合でも、支援のニーズは一様ではなく、個々に異なる配慮が求められます。

こうした状況の中、障がいのある人々の個別避難計画の策定を促進するため、災害対策基本法等の一部が改正されるなど、災害時の避難について社会的な関心が高まっています。そこで当日は、中央大学ダイバーシティセンターのコーディネーターである権藤眞由美氏をお招きし、個別避難計画書の策定方法や、熊本地震の際に大学で支援に携わった経験についてお話しいただきました。

例えば、個別支援計画の策定の際には、実際の避難を想定したうえで、電動車いすの学生に対し「もし被災した際には、電動車いすを置いて避難することも可能かどうか」など具体的な内容を調整することの必要についてお話がありました。そうした中で、障がいのある学生とその避難計画を立案するうえでは、日々の障がいのある学生の状況を十分理解したうえで支援者が十分に協議を検討することの重要性が語られました。

なお、参加者からは、以下のような感想が寄せられました。

・「東日本大震災や熊本地震を経験された講師の先生のお話を聞くことができ、大変興味深かった。障がいのある学生に関係する支援団体についても知ることができた。」

・「被災した当事者の話を直接聞くことで、障がいのある人の避難生活の困難さの一端を理解できたのではないか。」

・「一人ひとり障がいの特性が異なるため、支援方法も異なることを知ることができた。簡易担架（ベルカ）を体験し、災害時に救助が必要な方を運ぶ際の難しさを実感した。」

また、今後のテーマとして、次のような意見も挙げられました。「都立大学は広域避難場所であり、帰宅困難者支援施設にも指定されている。本当に緊急時（首都直下地震など）には、学外からもさまざまな事情を抱えた避難者が訪れると想定される。そのような状況に対応するため、学生や教職員を含めた検討の機会があるとよいのではないか。」

このような貴重な意見を踏まえ、ダイバーシティ推進室では今後も多様な取組を進めていく予定です。（益子）

東京都立大学 ユニバーサルデザイン・マニュアル【イベント実施編】発行

この度、学長室・ダイバーシティ推進室では、「ユニバーサルデザイン・マニュアル（イベント実施編）」を作成しました。

バリアフリーとユニバーサルデザインという言葉は、それぞれ広まりつつあります。バリアフリーは既存のバリアを取り除くことを目的とするのに対し、ユニバーサルデザインは、事前にバリアが生じないように設計する考え方を指します。

近年、大学においても多様な構成員の存在がより可視化されつつありますが、学修の機会は講義にとどまらず、キャンパスライフのあらゆる場面に広がっています。例えば、入学式や卒業式といった学事行事、文化祭、各部署で開催されるセミナーなどが挙げられます。また、学外向けのイベント（学会など）を行う際にも、多様な構成員が参加する機会が増えているのが現状です。そうした中で、それぞれの企画のさらなるユニバーサルデザイン化を目指し、本マニュアルを作成しました。

本マニュアルには、セクシュアル・マイノリティや文化的多様性を考慮した対応、障がいのある人への配慮などが盛り込まれています。例えば、参加者アンケートでは、性別表記に「答えない」「無回答」などの選択肢を設けることが考えられます。また、イベントで食事を提供する際には、アレルギー対応食やハラルフードなどを用意することで、よりユニバーサルデザインに配慮したイベントの実現に近づきます。障がいのある人への対応としては、車いす利用者が使いやすいトイレの案内、手話通訳者の手配、移動経路（導線）の確認などが含まれており、それらの準備は企画立案から当日までのスケジュールを少しずつ前倒しにすることや、ちょっとした配慮の積み重ねで対応できることが多いと考えられます。

本マニュアルでは、そうしたちょっとした配慮の積み重ねを、誰もが分かりやすく、気づけるようにチェックリスト形式でまとめました。本学の構成員はもちろん、セミナーやイベントを企画される皆様にも、ユニバーサルデザインの考え方を理解し、より良いイベントづくりに役立てていただきたいという思いで作成しました。

本マニュアルは当室のホームページからダウンロードが可能ですので、ぜひご活用ください。ダイバーシティ推進室では、今後も学内のバリアの改善やユニバーサルデザインの普及に努めてまいります。内容について詳しく知りたい方は、お気軽にダイバーシティ推進室までお問い合わせください。

（益子）

※ダウンロードはこちらから ⇒

「ダイバーシティ推進室での活動を振り返って」

2年生の夏に登録して以来、私は聴覚障がいのある学生が履修する講義で、主にPCテイクの活動を行ってきました。PCテイクとは、授業の音声を文字に変換し、リアルタイムで伝える支援です。ダイバーシティ推進室での活動を振り返ると、ほとんどの時間をこの活動に費やしていました。

しかし、卒業を迎えた今、「日常的に、息をするように支援する」ことこそが、真のバリアフリー社会の実現において大切だったと実感しています。

社会には、障がい者と名づけられた人から、まだ社会には発見されていない特性を持つ人まで、本人の意思とは関係なく、生きづらさを抱える人がいます。そうした人々が生きづらさを克服するために支援を受けるたび、申し訳なさを感じなければならない社会は、不公平であり、疲れるものです。

私は、マイノリティの存在が当たり前に受け入れられ、人が支え合いながら生きる社会こそが、本当のバリアフリー社会だと考えています。この2年間、支援が日常の一部になったことで、その思いはさらに強まりました。

興味があれば、ぜひ活動に参加してみてください。その力は、誰かの「当たり前」を支える手助けになります。

学生支援スタッフ
人文社会学部 人文学科
4年 佐藤 未唯亜

「拝啓 ダイバー室の皆さま」

4年間、大変お世話になりました。振り返るとあっという間だったなあと感じます。

支援活動では、支援利用学生・学生スタッフ同士の互いを思いやる姿勢に学ぶことが多く、目の前のことばかり意識が向いてしまう私にとって大変勉強になりました。

また、支援スタッフの活動説明会に私は数多く登壇しましたが、それを機会に新たな仲間が加わり、活躍する姿を見るのが嬉しかったです。さらに、大学祭出展や車いす体験などの課外活動では、大学の受動的な授業だけでは経験しえない、主体性を持って行動することの大切さや、相手の立場を想像する力を養うことができました。

ダイバー室は、一人ひとりの希望を尊重しつつ、適度に困ったときには支えてくれる素敵な環境があります。いつしか私にとってかけがえのない居場所となり、空き時間にはつい話し相手を求めて立ち寄るようになりました。真面目な学生ではありませんでしたが、肩の力を抜いていられる雰囲気作りに少しは貢献できたのではないかと思います。

この4年間で得た学びと経験は、これからの人生の大きな糧になります。本当にありがとうございました！

学生支援スタッフ
法学部 法学科 政治学コース
4年 高橋 千咲

「東京都立大学 多様な性に関するハンドブック」発行

ダイバーシティ推進室では、セクシュアル・マイノリティにかかる理解啓発の一環として、2020年7月に『セクシュアル・マイノリティに関する東京都立大学の対応ガイドライン』を作成し、公表しました。それ以降、学内での対応状況の把握が進んだことや、社会的な状況の変化も考慮して、今般、ガイドラインの改訂を行うこととなりました。改訂にあたって内容・構成を再検討し、本学での対応状況とともに、多様な性に関する基本的な情報を広く提供することを目指し、名称を『東京都立大学 多様な性に関するハンドブック』と改めました。

新しいハンドブックは３パートに分かれています。「本学の現状と取組」の項では、本学における性別情報の取扱いや、各キャンパスでの更衣室の状況、教職員の福利厚生などの対応状況と学内の相談窓口、ダイバーシティ推進室の取組などをまとめています。「対応の基礎」の項では、日常生活の中で、私たち一人ひとりが心がけておきたい考え方や、友人や学生、同僚などから相談やカミングアウトを受けた場合の基本的な対応の方向性を記しています。「情報・資料」の項では、基本的な用語の解説と、学外の相談機関や当事者の居場所づくり事業をまとめました。

ハンドブックはダイバーシティ推進室のWebサイトから閲覧・ダウンロードすることが可能です。ぜひご一読いただき、このほかにも本学で対応している事例などありましたら、ダイバーシティ推進室へお知らせください。みなさまの声を踏まえ、今後もこのハンドブックは、随時改訂を行っていく予定です。（藤山）

セクシュアル・マイノリティ教職員研修

セクシュアル・マイノリティに関して、大学の教員・職員として知っておくべき情報や対応の原則などの理解を深めることを目的として、オンラインでの研修を行いました。今回は総務課との共催という形をとり、東京都公立大学法人のすべての教員・職員を対象に実施することができました。

ダイバーシティ推進室の藤山が講師を務め、セクシュアル・マイノリティについての概説、大学における当事者対応の事例紹介、大学における対応の原則と教職員ができることについての解説などを行いました。質疑応答においては、「現状、実習時の服装が男女別になっているが、これは是正すべきか」「LGBTQ＋に対して否定的な見方をしている職場の人に対して、どのようにアプローチしていくべきか」など、実体験に基づいた質問が寄せられ、参加者の関心の高さがうかがえました。

参加者からは、「大変実践的で有難い内容でした。」「将来入学するかもしれない高校生の相談を受けることがあり、本学には専門に対応できる方がおられることは不安に思う将来の学生に向けても心強いことと思います。」「一部の人でまだまだ理解が進んでいない人がいるように思います。このような講演を行い続けていただき、学内の教職員の偏見が無くなるとより良い大学になると思います。」など、肯定的な感想を多くいただきました。また、今後について、「LGBTQ＋については、最先端の取組について紹介していただけるとありがたいです。」といった要望も寄せられました。こうした意見やニーズを受け止め、今後の継続的な取組に反映させていきたいと思います。（藤山）

コラム

ダイバーシティとスポーツ ～スポーツ報道とジェンダー～

ジェンダー研究の場面でスポーツ報道を取り上げる際、しばしば言及されてきたのが「選手の描き方の男女差」です。男性に比べ、女性選手に対してはタレント的な扱いや容姿への言及、子ども扱いなどが見られることに批判的な指摘がなされてきました。以前に比べれば改善されたとはいえ、今日でもこうした傾向はなくなっていません。

しかし、当の女性選手たちは、必ずしもこうした取り上げられ方を否定的に捉えているわけではなく、むしろ競技の認知度向上につながる可能性があるものとして、肯定的に捉えるケースも少なくありません。「競技と無関係な描き方をしている」という指摘についても、競技に関することだけを伝えるのがメディアの役割とは言えない環境であることも確かでしょう。昨今では男性の選手についても、バラエティ番組などでアスリートではない側面を見せることが少なくありません。

こうしたことを踏まえれば、ジェンダー研究におけるスポーツ報道をめぐる議論のあり方も考え直す必要があると言えます。女性選手の描き方の批判にとどまるのではなく、「どういった描き方が望ましいのか」「どういった報道が求められているのか」という点について、専門的な知見を活かしながら、メディアの作り手と建設的な対話を行うこと、いわば「スポーツ報道に新たな価値を作り出すこと」が必要なのではないでしょうか。そうした対話の場に「描かれる側」の選手も参画することができれば、そこで生み出される新しい価値は、さらに望ましいものとなるでしょう。（藤山）

障がいのある学生支援2024年度総括

今年度の修学支援では、精神や発達障がいのある学生への対応、それから難病の学生への対応など、幅広い支援ニーズが顕在化してきました。そのため、新たに講義のオンライン配信などの対応についても協議する１年となりました。オンライン環境の整備は、障がいのある学生にとって学びの機会を広げる重要な施策であり、今後も継続的に検討が求められます。

こうした中、例年行っている学生支援スタッフの課外活動では、高尾山登山やBBQ、東京ディズニーシーへの遠足などを実施しました。こうした活動を通じて、学生支援スタッフは障がいへの理解を深めるとともに、障がいのある人たちのリアルな生活場面を垣間見る貴重な経験を得ることができました。例えば、視覚障がいのある卒業生との関わりの中では、移動介助をしたことがない学生も率先して介助を行いました。また、発達障がいのある卒業生との対話では、障がいの有無に関わらず、それぞれの学生が日常の困りごとを素直に相談する場面が見られました。こうした交流を通じて、困りごとの延長線上に“障がい”があることを認識するきっかけとなったのではないかと思います。

こうした大学外での体験は、次年度以降の支援活動にも生かされることでしょう。今後もこのような機会を継続して設けていきたいと考えています。関心のある方は、ぜひ一緒にご参加ください。（益子）

学生支援スタッフ振り返り会

2025年2月17日、今年も活動の振り返り会を実施しました。活動の振り返りや、次年度4月に予定している活動についての打ち合わせに加え、今回はシニア支援スタッフ制度の導入に向け、「どのような要件を満たす人がシニア支援スタッフに認定されるのか」といった点についても議論しました。

このスタッフの要件を決める際には、多様性を考慮した基準をどのように設定すべきかについて活発な議論が交わされました。その様子からは、卒業後の社会人生活にも求められる視点を持って考える姿勢がうかがえ、とても頼もしく感じられました。

次年度も、学生たちの活動に引き続きご支援・ご声援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。（益子）

東京都立大学一時保育施設「都立大 KIDS」

南大沢キャンパス付近で運営している「都立大KIDS」では、毎月「園だより」を作成しています。都立大KIDSの先生方手作りの「園だより」には、その月の保育のようすがたくさんの写真とともにまとめられています。ダイバーシティ推進室のWebサイトからも見ることができますので、子どもたちの笑顔であふれている姿をぜひご覧ください。都立大KIDSは、本学の教職員、学生のみなさまが利用できる一時保育施設です。施設見学や体験入園も随時受け付けています。詳しくはダイバーシティ推進室までお問い合わせください。（藤山）

コラム

ダイバーシティ・ブックレビュー（学長室 ：生駒 三馨音）

遠藤まめた著『ひとりひとりの「性」を大切にする社会へ』 新日本出版社

本書は、トランスジェンダーの当事者である著者が実際に体験したことや日本で話題になったドラマやニュースをもとに、さまざまな角度から多様な性について述べられています。真面目な話もありながら、著者のユーモアかつ鋭いツッコミにより、サクサク読み進められる本です。

特に著者が旅したスウェーデンのトイレの話は衝撃を受けました。スウェーデンでは男女共用トイレが広く普及されており、通路からいきなり自宅のトイレのような個室に入るため、狭いスペースで誰かと顔をはちあわせるストレスがありません。また、個室の中には手洗い場も完備されており、全ての作業を中で終えてから外に出られる仕組みになっているとのことです。トランスジェンダーの方だけでなく異性介助の必要な方、乳幼児連れの方等も気兼ねなく利用できるように配慮されたトイレとなっています。自分が当たり前だと思っていた日本の男女別トイレが、海外から見ると当たり前ではないことにハッと気付かされました。頭の中では、自分と他者の価値観や考えは異なるものと理解しているはずが、無意識のうちに自分の価値観を押し付けてしまうことがよくあります。後々振り返り「どうしてあの時こう言ってしまったのだろう」と後悔する日々ですが、他者との違いに向き合い、考え続けることが大切だと思います。

新たな「気付き」を発見し考えるきっかけとして、皆さんも本書を手に取っていただけたらと思います。

編集後記

この度、「ユニバーサルデザイン・マニュアル」と「多様な性に関するハンドブック」が発行されました。自分には関係ないと思っている人も多いかも知れませんが、実は対象の方のためというだけでなく、誰にとっても心地よく優しい空間や時間をつくっていく事に繋がります。ぜひWebサイトを覗いてみてください。（兼子）

東京都立大学　ダイバーシティ推進室
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1　図書館本館1階
電話：042-677-1337（直通）／内線2571
E-Mail：diverwww@tmu.ac.jp
URL：https://diversity.fpark.tmu.ac.jp/
発行日：2025年3月28日
編集・発行